米欧亜回覧

第７２号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集委員会

秋の全体例会は、板谷敏彦氏の講演！
「グローバルに展開する金融資本の跋扈」を問う

秋の全体例会は、十月十三日（日）午後一時より一橋の学術総合センターで行われる。「金融の世界史」、「日露戦争、資金調達の戦い」などの著書がある板谷敏彦氏を招く。板谷氏は、二〇〇六年にニューヨークで投資顧問会社を設立し、初の和製ヘッジファンドとして話題になった人物であり、ウオール街の現場における豊富な経験と鋭い分析によって、この大テーマについて講演をいただくことになった。グローバルに跳梁する金融資本の動向は目を離せない。リーマンショック、デリバティブ、レバレッジ、タックスヘイブンなど、金融工学の実態にも言及されるものと期待される。多数の会員の参加をお薦めしたい。

全体例会（7月25日国際文化会館）

七月全体例会
保阪正康氏の講演、安倍首相の歴史観と日本人の知的劣化に危機感！

七月例会は、参議院議員選挙の結果を踏まえ、昭和史の実証的研究の第一人者、保阪正康氏の講演と熱心な質疑応答が行われた。保阪氏は前半、昭和史の研究から得られた証言の信憑性について具体的な事例についての生々しい体験談の披露があり、聴衆は大いなる感銘を受けた。そして後半では参院選で大勝し総理になった「安倍晋三の方程式」について鋭い分析がなされ、さらにはそれを選んだ国民の病弊、知的劣化に危機感を募らせ、今後についてもいくつかの提言をされた。

（詳細は二・三頁）

グローバルジャパン研究会再開、連続二回、熱気を帯びる

グローバルジャパン研究会は、八月二十四日第一回が行われ、新しい試みとして泉三郎氏の「ドンキホーテ的提言」？もあり、それに刺激されてか議論が沸騰してテーマの半分も消化しきれず、急遽、九月七日に二回目が行われ、またまた白熱した議論が展開された。

そして引き続き九月二十八日には第三回を行うことになり、塚本弘氏が「安全保障と憲法問題」について提言することになった。当面、半年くらいこの方式で毎月会合をひらくことになったので、関心のある方は是非出席していただきたい。

（詳細は四頁）

電子メールと印刷物の郵送について

これまで、全体例会の案内は「往復はがきで」行ってきたが、メンバー間における電子メールの普及と郵送費の節減のために、今回からアドレスの登録のあった方にはメールの案内のみとし往復はがきはとりやめることになったのご承知いただきたい。なお、まだメールアドレスの登録をしていない方は是非事務局にご連絡いただきたい。

「着眼大局・着手小局」か、「着眼小局・失着大局」か

泉　三郎

このたびの東京オリンピックの招致活動で思ったことがある。いま日本にとって一番何が大事か、何が大局か、安倍首相の判断をどう解釈すべきかということをである。

そもそも最近のオリンピックはすっかり商業化してしまい私の関心は薄れていた。しかも今回は「東西文明の架け橋」や「イスラム圏初」という大義からしてもイスタンブールが適当と考えていた。しかし、石原・猪瀬の二代にわたる都知事の熱のいれようは半端でなく「オールジャパン」とやらでマスコミも巻き込んでの大運動となった。そして極めつきが安倍首相のブエノスアイレスへ乗り込んでのあのスピーチである。

ポイントはフクシマ汚染水漏れでの事態をどう説明するかにあった。そこで乾坤一擲「汚染水問題は完全にコントロール下にあり全く心配はない」といいきったのだ。「エエ！？　ウソ！？　大丈夫か！？」と唖然とした。恐らくそう感じた人は多かったと思う。フクシマの現場で決死の覚悟で汚染水と戦っている人、農作業も出来ず漁にも出られず、なお仮設住宅で暮らしている人びと、その他さまざまな人が、そう感じたに違いない。

日本国にとって「東京オリンピック」は小事である。東京にとっても「大事」ではない。日本にはもっと大事なことがゴマンとある。その極めつきが原発事故への対応だ。私はひょっとして安倍総理には「深慮遠望」があるのかとも思った。それは「着眼大局・着手小局」で、まずＩＯＣで「国際公約的発言」をし、それをトリガーに「政治生命を懸けて福島原発の事故を収束させる」大決心・大覚悟をしたのだという読みである。そして、これを契機に、東京のみならず五十四基の原発をもつ日本列島を核のゴミ処理も視野にいれて「美しい安全な国」に甦らす大構想を内に秘めているのではないかと夢想したのである。

しかし、それは単なる幻想であるかもしれない。保阪氏の心配、歴史認識の危うさもあり、このところみえる自信過剰も重なって、「着手小局・失着大局」に終わらないことを祈るばかりだ。

第68回 全体例会

保阪正康氏講演
参議院選挙を振り返って
「国政選挙の理想と現実」

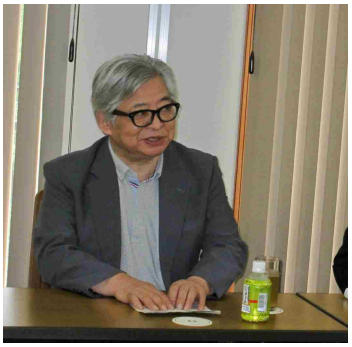
七月二十五日（木）国際文化会館四階会議室で全体例会が開催された。

保坂正康氏講演に先立ち、第一部は近藤義彦理事の司会進行のもと会務部会報告。泉三郎代表により本会のコア部会の一つグローバル・ジャパンの今後の展開への抱負が述べられた。また保坂氏を招いた経緯背景説明および総括の挨拶があった。

部会の報告は、小坂田國雄氏が実記を読む会を、小野博正氏が歴史部会を、永島脩一郎氏が英訳実記の会を、中山進氏がニューズ編集についてそれぞれ報告。七月四日（木）～五日（金）に奥多摩園で実施された、実記を読む会・英訳実記の会・歴史部会共催の「納涼と映画観賞の会」については企画者たる橋本吉信氏が報告した。更にさかのぼる五月十五日（水）～十六日（木）の信州歴史ツアーは、佐久間象山のゆかりの地や小諸懐古園、旧中込学校他を巡る充実したものとなった。泉代表、小野博正氏、山田哲司氏、塚本弘氏ほか参加者より、実り多かったとの感想が述べられた。本ツアーの企画者である井出亜夫氏の三百年続く実家の橘倉酒造でも歓待いただいた。各氏より謝意の表明があった。

続いて第二部は、当会の会員でもあり、過去何回か講演をいただいた保阪氏を泉代表が改めて紹介し講演開始。最新の政治状況の分析があった。参議院選後の支持率の高い安倍政権ではあるが、米国の本音の対日感は異なっていて真の二国間の信頼関係が構築されているとは言い難いとの指摘は参加者の共感するところであった。

（写真・文責）近藤　義彦



例会講師の保阪正康氏

講演要旨

七月の参議員選挙での、与党自民党・公明党の圧勝を受けて、今回の選挙をどう評価すべきかを、近現代史、とりわけ昭和史を実証的に研究され、その成果を多角的に発信し、百余の著書を持たれる保坂正康氏をお招きして講演と討論会を開催した。

司会は泉三郎氏、参加者は三十八名、一時間の講演とそれに続く、活発な質疑応答がなされた。

初めに、保坂氏の昭和史に対する研究姿勢について開陳された。氏が三千人余の歴史的証人との面接を通じて、アカデミズムとは違う歴史を追及してきたのは、昭和二十一年に小学一年生として、戦後最初の民主主義教育を受けたものとして、アメリカン・デモクラシーと日本的デモクラシーを経験しながら、昭和史を研究する内に、歴史は時には当事者の証言そのものも、作為または無作為に、記憶の歪曲化、改竄が行われやすく、歴史のチェッカー役の必要を痛感したことによる。一割は嘘の証言をし、一割は誠実の証言をするが、八割は記憶を調整しながら修正してしまう一般人。人々との面接・面談を通して、人には癖があり、その方程式を見極める必要があるという。

大勝した自民党首・総理の安倍晋三の方程式は何か。彼は結論を言うが、立論とそこに至るプロセスがない。日本国憲法は占領憲法であると簡単に言う。法体系を欠いたまま国防軍にしなければならないと言う。正しい昭和史の認識のないままで、政治的アジテイターに堕している。これにはさすがの自民党の古老たちも懸念を示している。オバマ大統領も安倍首相と会っても議論がないので意味がないと思っている。主義は多少違っても中国・韓国の首脳なら哲学があると思っている。中・韓は日本の孤立を望んでいるから厄介である。安倍や橋下の歴史観は中・韓を刺激する。中・韓の国内反日デモは、北京大や清華大の学生が動かない限り、騒がず静観するのが正しい。

こういう政治家を選んでしまうのは、日本の後退期、国民の疲弊、日本人の知的劣化と言えよう。過去十年間に八人も首相が替わったのは国民大衆がいい加減だからだ。

今回の自民党の大勝も、期待されて政権交代を果たした民主党が、結局、政権担当能力のない、無能集団の烏合の衆とみなされ、その反動で自民党に票が行ったに過ぎない。

民主党は一度解党して、綱領から立直さなければ未来はない。

自民党も今後割れる可能性もある。二大政党に戻るのは、数年を要するかもしれない。

ジャーナリストの責任も大きい。明治時代新政府に入れなかった幕臣が、自由民権運動と政府批判のジャーナリストとなり、大正には、大阪毎日が出たが、新聞が爆発的に売れるようになったのは常に戦争期で国家の宣伝要因の役割を果たしてきた。その本質は、今も変わらない。アメリカで戦争慰安婦の像が立てられたが、アメリカ人も、みんな田舎者で、外国の正しい知識を持っている国民は、一％もない。日本からはタイムリーなインターネットを使った正しい主張や知識の発信が不可欠の時代になった。

首相経験者には、自伝を書けと言い続けている。それが歴史の中で、責任を果たすことになる。歴史的責任を持たない指導者が出ると、特攻や玉砕のような間違った作戦が行われてしまう。今後の日本の取るべき道として、江戸時代の幕藩体制が一つの参考になるかと思う。あれは、三百藩の自治国家と幕府は連合政府と見れば、各藩独自の支配体制と文化・産業があり、天皇は神でなく、農耕の神であり、象徴であった。

現在の民主主義も世代間によって違う同一化された民主主義があり、それを前提に今

後の国政を考える必要がある。最近の若者は、好き嫌いをはっきりしない新しい文化がある。男女もほぼ同権だ。若者に、戦前の社会を実感してもらうために、昭和八年の社会の空間に戻って、その時の言葉遣い、授業態度、社会常識の中で、授業をしたことがある。学生たちには、痛烈な体験で、どんな授業より歴史を体感できたようだ。官僚の問題も難しい。比較的に柔軟な人もいれば、自説を曲げることは屈辱的と頑固の人もいる。

最後に、選挙には投票率で支持政党が左右される。①投票に行かない人に、罰則として税を課するとか、②比例代表制の見直しが必要だ。これは不要だが、若し、残しても議会では、0.5票計算ぐらいでよいのではないか。

二次会で、議論の続きを期待していたが、保坂氏に急用が出来て果たせなかったのは誠に残念であった。

（文責）小野　博正

7月全体例会の講演会は会議形式

☆新会員自己紹介☆

今年度になって会員となる方が増えてきました。五人の新会員の自己紹介です。

高橋 三雄

二〇一三年の正月、1年後に迫った定年後の世界1周を夢見て具体的なプランを練っていたとき、書店で泉三郎著、「岩倉使節団　誇り高き男たちの物語」に出会いました。「維新革命の立役者たちのグランドツアー」、とくに、地理感のあった米国編を興味深く読みました。あらためて、それまでの世界遺産をめぐるといったありきたりな目的にかえて、明治維新前後の歴史を追う旅も楽しいかな、と思いました。さいわい、大学の同期生が泉さんのゼミの後輩であったこともあり、「実記を読む会」に参加させていただくことになりました。

古俣 美樹

今年の四月から小松優香さんの後任として事務局に入りました古俣美樹です。母、納家弘美に同行して中国旅行に参加させていただいたり、英訳実記を読む会に参加させていただいたりしていました。父の仕事の関係でパナマにて生まれ、チリで育ちましたので海外見聞録にはとても興味があります。子どもがまだ小さいため、行動範囲や自由度が限られてしまうのが残念ですが精一杯事務局のサポートをさせていただきますので、どうぞよろしくお願いします。

兼子 千尋

練馬区練馬在住、猫とショパンをこよなく愛し、音大在学中から今日まで「ピアノの先生」を生業としております。

スピード感溢れる幕末・明治。その後の未来を変えた明治維新。ワクワクするこの時代の日本や世界を、多方向から学ぶ事ができる贅沢な時間に参加させていただき、とても幸せに思っています。そして、学生に戻ったような気持ちで、皆様の講義を楽しんでいます。受身な私ではありますが、どうぞ　よろしくお願いいたします。

植木 園子

『遠い崖』を読み進め、第九巻「岩倉使節団」を読んでいる時に偶然の出会いがあり、入会いたしました。皆様が積み上げられてこられた成果に少しでも追いつけるよう、多くの機会に参加させていただこうと思っております。

私は音大のピアノ科出身で、仕事も趣味も音楽です。クラシック音楽の世界も前世紀に頂点を迎えてしまっているように感じられ、昔ながらのアナログ・レコードで古い録音を聴いたりするのが今一番の楽しみです。

太田 裕子

新入会いたしました太田裕子です。小児科を開業しています。親との関係に、以前とは違った苦労を感じる様になってきました。

趣味は、旅行と絵を見ることですが、その時代背景がわかっていれば、より深く楽しめるのでは、とつくづく思います。この頃は、そのために歴史にも興味を持っています。皆様に教えていただきながら、いろいろと勉強していきたいと思っております。

訃報　永富邦雄氏「偲ぶ会」のご案内

当会の幹事を長く務められ、とくに歴史部会の担当として懇篤にお世話いただいた永富邦雄氏が七月十九日逝去されました。享年八十三歳。近年膵臓ガンに侵されながらいつも前向きに明るく過ごされたお姿が目に浮かびます。衷心よりご冥福をお祈りしたいと思います。

永富氏は軽妙な語り口でいつもまわりの人を笑わせ楽しませてくださいました。第一生命保険の専務まで務められた体験を踏まえて「年金無血革命」（文春新書）の著書もあり、伊藤博文公の孫でもあったため近代史にも造詣が深くいろいろ教示を受けました。また、「歴史ツアー」を企画・催行され、伊藤博文邸や吉田茂邸を訪ねた大磯ツアーには空前の八十三名が参加し、下関、山口、萩、光市を訪ねた長州ツアーには二十名が参加し、それぞれに素晴らしい思い出をつくってくださいました。

そこで、十月二十一日（月）、十五時～十七時、国際文化会館で故人を「偲ぶ会」を催したいと思います。希望の方は係までお申し込みください。

・会費、二千円（ドリンク代・会場費含む）

呼びかけ人：泉三郎、山田哲司、小野博正

連絡先：事務局　古俣美樹

永富邦雄氏
（2012年10月）

再開グローバル・ジャパン研究会、スタート・・・・「世界に通用する新しい日本像を求めて」

八月二十四日、塚本弘氏の司会進行で行われた。まず、泉三郎氏より、新趣向として試みに「提言道場」的なものにしたいとの説明があり、続いて基本テーマ「世界に通用する新しい日本像を求めて」に添いながら『日本をどんな国にしていきたいか―大ビジョンを探る』と題した提言がなされた。

その提言は七項目にわたっているのだが、本日は、その「はじめに」と題する総論的部分とその討論、小休憩の後、第一テーマである「メタボ的経済成長から」についての討論が行われた。そこでは、塚本氏の巧みな司会ぶりもあって、異論、反論、オブジェクションが続出、「白熱した議論の場」となった。お陰で当初予定の第二、第三テーマに及ぶ時間はまったく皆無となり、急遽、その続きを九月七日に第二回として行うことになった。

グローバルジャパン研究会（8月24日）

そして、今後の運営については、これまでの担当だった石垣事務局長が多忙のため主幹事辞退の申し出があり、代わりに永年「現未来部会」担当の主幹事だった塚本氏が返り咲き、小野博正幹事が輔佐することに決まった。

なお、出席者は、ここ数年の間及び最近入会された人が多く、平均年令が多少若返り、老壮青のバランスがとれてきた感じがする。

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事　塚本 弘

hiroshi.tsuka@i.softbank.jp

■第一回

八月二十四日（土）参加者十五名。泉三郎氏は、はじめに「日本の近代百六十年を振り返る」と題して、「明治期」の日本が「独立」を目指して、それを達成する過程と、戦後期に「富国富民」を目指して、それを達成していくプロセスを概観した。そして明治期には「富国強兵」や「殖産興業」や「憲法の制定」に成功したものの、その成功体験がかえって「強兵偏重」を生み帝国主義へ傾いたことを指摘し、「戦後期」は、平和で豊かな生活を実現できたのだが、それが傲慢や怠惰を生み、「経済偏重」や「GDP絶対主義」に陥ったとの認識を示した。

そして、それを踏まえて、第一テーマの『「メタボ的経済社会」から「生きがいと幸福の充ちた社会」へ』の提案がなされた。GDPの高さと、幸福度は比例せず、世界的に見るとむしろ中南米のようなGDPの低い国や、国内的に見ると北陸のような地方の方が主観的幸福度指数が高いことをデータで示し、経済は幸福への手段であるとして、これからは適正所得の分配や、労働時間の短縮、ワークシェアリング、まっとうな仕事と安定収入こそが求められているとし、今後は非貨幣的価値、健康、家庭、地域社会奉仕（ボランティア、NPO）、文化、芸術、「生き甲斐」の成長を目指すべしと説く。

これに対し、参加者から各種の議論がでた。戦後民主主義の成果、国民総中流化が進み貧富の格差は世界水準よりみて少ないこと、然し、グローバル化の進展で、賃金の安い国に仕事がシフトし、正規社員を減らして、賃金の引き下げ圧力となり、そのひずみが一部の若者にしわ寄せされているとの意見や、年金や医療費の増大を生み、若者の未来を食い潰している問題も指摘された。

■第二回

九月七日（土）参加者十四名。泉氏による第二のテーマ『「征天的科学進歩主義」から「自然と生命の摂理を重視する順天的科学」へ』の提言がなされた。西洋的科学技術主義・進歩主義は確かに文明を豊かにしてきたが、科学技術の進歩が主人となり、人間が使役され、振り回されていないか。次々と生み出される新製品に振り回され、追いかけるラット・レースになっている。医療についても同じような事がいえるとして、薬づけ、過剰治療、延命治療、さらにクローン、IPS細胞の問題が提起され、さらには核融合、核兵器、原発、核のゴミの問題に言及、最先端技術は「神の領域」に入り制御不能と化したのではないかとの認識が表明された。

そして、徳川の「元和偃武」に倣い「鉄砲を捨てた日本人」の知恵に見習い、科学技術をもちながら不急不要なことには使わないという「余裕の哲学」、謙虚に自然の摂理の中で生きる「知恵」が必要ではないかとの提言を行った。そして、今や世界に通用する倫理基準の提示が必須であるとの主張がされた。

また、第3テーマの『「知識情報の枝葉末節教育」から「よく共に生きるための体験的根幹教育」へ』では、知識情報偏重教育のガラクタ詰め込み教育の現状を痛烈に批判し、幕末維新の教育（家庭、私塾、徒弟制度、藩校、郷中教育、全寮制）などに学んで、十五歳前後に、一年程（できれば二年）合宿体験教育を施し、農漁林業の体験や老人幼児の介護など、人間力を養成、やる気・モチベイション教育をすべしとの提案があった。

参加者との討論は、丁々発止で、或は熱く、激しく、原発の擁護派と廃止派との激論、人間こそが地球の癌という意見も出た。教育問題では、わが子さえよければのモンスター・ペアレンツの存在や詰め込み主義の学力低下、考える力が全く養成されていないこと、非常勤教師の増大で人間教育は先生には期待できない現場の現状などを参加者の教育関係者から聞かされて、暗澹たる気分になった。昔の尊敬される先生の存在は少なくなり、家庭が、先生が、社会が、職場が人を育てた環境は減退しているとの声が挙った。また、科学実験が教育から消え、子供の好奇心を養う機会がなくなり、ペーパーテスト中心と詰め込みカリキュラムが子供を追い詰めているともいう。3～5歳で子どもの基本が形作られるが、共稼ぎのお母さんは保育所任せで、参加された小児科の先生は、四十前後の母親とのバトルにつかれて、小児科を止めたいと思っているという発言もショックだった。教育の原点の見直しとなると根は深い。

（文責）小野　博正

歴史部会報

担当幹事　小野 博正
mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■勝海舟～江戸城無血開城の英雄にして倒幕の仕掛け人（講師：小野博正氏）

六月十七日開催、参加者十四名。熱烈なファンもいるし、勝海舟を論じるのは難しいがあえて挑戦してみた。

勝海舟が江戸城を新政府軍へ受け渡しに際して、江戸市街への戦禍を防ぐために講じた諸政策とその政治的手腕はやはり最大限に評価さるべきだろう。維新政府が順調に滑り出したのは、無血開城によって旧幕府軍の反乱を最小限に抑えた海舟の功績であろう。

けれども、注目すべきは僅か四十俵の貧乏旗本から、営々と上り詰めた海舟を、この男と見込んで、二百七十年の幕府の幕引役に選んで全権を与えた徳川慶喜の慧眼である。歴史家も、海舟も、慶喜自身もその点に触れることがなかった。慶喜は、二心殿、剛情公などと綽名されながら生涯沈黙を守った。彼は、将軍後見職となる遥か前から、幕府の命脈の長くないことを、再三述べており、水戸藩伝統の『尊王賤覇』（もし江戸の徳川家と京の朝廷との間に弓矢のことがあれば、潔く弓矢を捨て、京を奉ぜよ）との水戸の家訓を最後まで貫き通したとの視点で見れば、別の歴史が見えてこないか。

慶喜は、元来海舟を好きではなかった。その海舟を選んだのは、新政府軍の中核である薩長土人脈に通じている男は、勝を置いていないと判断したからである。海舟が、西郷に「幕府に人はいない。列藩会盟して、共和を起こせ」と吹き込んで倒幕を示唆していることを、慶喜はよく承知していたのである。

もう一人の歴史の陰に消えた男、小栗上野守忠順と海舟を対比させたい。海舟が、売国奴の親仏派と非難し続けたのが小栗である。海舟と似て、直言家で幕閣と諍いが絶えず、幕末に、中山道から東上した岩倉具定征東軍に斬殺されるまでの九年間に、17回も職を変えさせられている。海舟とは好敵手であった。鳥羽伏見の戦いから逃げ帰った慶喜に、徹底抗戦を主張して、即刻首になった小栗は、それまでは、むしろ慶喜に愛され、幕末の幕府改革（政治、経済、軍事）を黙々と遂行してきた。後に、大村益次郎は小栗の戦略（箱根で新政府軍を閉じ込めて、沖から幕府軍艦で攻撃する）で徹底抗戦されていたら、新政府軍は負けていたかも知れないと述懐している。慶喜は、その小栗を捨てて、海舟を選んだのはなぜか。ここに、歴史の謎の面白さがある。後年、大限重信をして、「小栗は謀殺されるべき運命にあった。何故なら、明治政府による日本の近代化構想は、そっくり小栗のそれを模倣したものである。」と言わしめたことも想起したい。

小野　博正

■福沢諭吉―そのアキレス腱を問う？（講師：泉三郎氏）

七月十九日開催、参加者十七名。

戦後とくに最近の福澤諭吉評価は、民主主義者としてまた慶應義塾大学の隆盛と相俟って非常に高いといってよい。が、明治から昭和前期を通じ、その毀誉褒貶はさまざまで、一方で大賞賛の数々があるかと思えば、一方では大批判・悪評も多く、「拝金教の大和尚」、「西洋かぶれの国体無視」、「アジア蔑視、植民地主義、帝国主義者」の評もあった。今回はそうしたものを一覧した上で、あえて「アキレス腱」を三つの点から探ってみた。

一つは、「福翁自伝」での言説にウソがあること。幕臣時代に将軍に対し幕府主導の近代化を説いて「長州をひとひねりしてしまえ」などと建言しているのに、そのことには触れず政治に無関心だったといっていることである。

二つは有名な「痩せ我慢の説」に関してであるが、これは明らかに勝海舟に理があると私は思うので、福澤先生は犬の遠吠えをしている風にみえるということである。

そして三つには「福翁百話」における超楽天主義の言説であり、「黄金時代」の到来を説くところは、どうやら高齢のせいの恍惚の気配が感じられるという点である。

それにしても、晩年、福澤はそれまでの言説からすると、ちょっと意外なことを言い残した。それは、もっとも縁の遠いと思われた宗教への思い入れである。結局、「金銭を重んずべし」との主張が拝金教に堕し、「独立自尊」の主張が利己主義に堕したことへの内心忸怩たる思いがあり、そのバランスを取り戻すための「人品を高尚にすること」であったのではなかろうか。

しかし、総じていえば、これらも文才抜群にして言葉の魔術師、矛盾をものともせず言い放つ激語乱筆だった福澤先生の面目躍如という観もあり、「舌先三寸」が「五寸」になり、「一本の筆」が勢いにのって「二本のペン」を振りまわすことになったとも解され、それもまた「大魅力の源泉なり」というのが福澤ファンの私の感想である。

泉　三郎

信州歴史ツアー記念文集できる

五月十五、十六日に十六名が参加して催行された、松代、佐久、小諸を巡る信州歴史ツアーの記念文集ができた。

二〇一〇年の中国・上海万博ツアー以来、国内ツアーとしては二〇〇六年の薩摩歴史ツアー以来となる記念文集は、参加者十三名の感想文を載せた写真入り・カラーの三十六頁の内容。

当会ホームページに掲載していますのでご覧ください、また、印刷してお読み頂くこともできます。

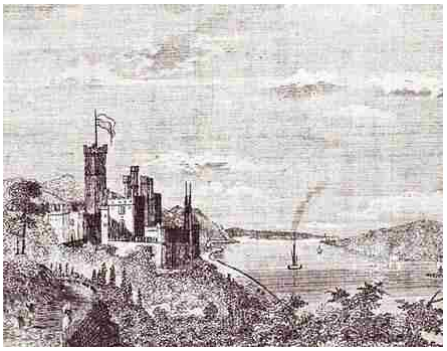
実記を読む会報告

担当幹事　小坂田 國雄
Tel&Fax 044-987-1531
osakadakunio5256@jcom.home.ne.jp

■第百七十三回

六月十三日開催、第五十五巻 プロイセン国の総説。

ヨーロッパ大陸中央部の大きな平野は、ドイツ人種が住む地域であって、全域はたいへん広く、中世以来帝王や大貴族が興亡を繰り返してきた。ほかの諸国の君主も、これらの家々と互いに婚姻関係を結んで、まるで瓜の蔓のように欧州全域に広がった。したがってドイツと欧州の関係は極めて緊密で、重要である。現在でもドイツ全域に貴族は多く、侯爵領とか伯爵領など数十の国に分かれている。その南の部分はオーストリア連邦を形作り、中央部からフランス国境に至る高原地域はライン同盟を作り、南ゲルマン（南ドイツ）とも称される。その西北部に散在する国々は北ゲルマン（北ドイツ）と呼ばれるが、その中で最大の王国がプロイセンである。


ドイツのライン川風景（『実記』）

さる一八七一年、プロイセン国王ウィルヘルム一世は南北ドイツを統一してドイツ連邦の帝位に就き、プロイセンの首府ベルリンに連邦議会を置いた。そこで、対外的にはドイツの国名で外交を行うが、対内的には従来のように各貴族の所領の自治に任せている。

河川は南の方一帯が山岳地帯なので、みな北に向かって流れている。エルベ川が地域の中央の主要部を流域とし、ハンブルグ港から海に入っている。延長千百キロの長流でベルリン、ドレスデン、ハンブルグなどの大都市はみなこの川に沿っている。東の部分ではオーデル川が、長さ八百八十キロで、フランクフルトなどの都市がこの川に沿う。また、ヨーロッパで名高いライン川は南ドイツをゆったり回りながら流れ、ドイツの経済生活で最も大きな役割を果たしている。

プロイセンの九分の七はドイツ人種でその性格は慎み深く素直である。宗教はプロテスタントのルター派を国教としている。全国民の三分の二がその信者である。十分の一がローマ・カトリックの信者である。

西暦　1873年3月7日

オランダのハーグを発ち、ドイツ・オランダ国境近くのドイツ領内のベンザイム駅に着いた。ウェストファリア州内を走り、州都のミュンスター市を通過し、午後五時半にエッセン市に就いた。エッセンはクルップ砲の生産で有名である。

西暦　1873年3月8日

エッセンのクルップの工場を見学後、ベルリンに向かった。エッセンからベルリンまで約六百三十キロ。オランダのハーグから約九百六十キロ。

ドイツ（プロイセン）を使節団一行は旅をした。この機会に、何故ドイツは第二次大戦前にナチスの台頭を許し、悲劇的な結末を迎えたか、P.F.ドラッカーの書「経済人の終わり」をもとに考察した。

本書は二十世紀の大戦を自ら経験したドラッカーが、より人が幸福になるために考えるべきことを訴えたものです。「民族・人種」を煽って独裁になったナチスドイツ、「理想社会」を煽って独裁になったソ連、そして独裁者という共通項で両国が結びついた。人々が幸せになるためには、イデオロギーなるものに個々人が敏感になり、それが行き着く先を想像しなければならない、ということを教えてくれる。

（文責）小坂田 國雄

■第百七十四回

夏は都心の会議室から離れて、実記に関連する映画鑑賞と納涼・懇親を兼ねたプログラムで過ごそうとの発想で、三年目の「納涼と映画鑑賞の会」を「奥多摩園」で開催した。

「歴史部会」「英文実記の会」と三部会共催で、十六名が参加して、七月四日（木）～五（金）一泊二日、深夜まで独、英米の評価高い三本の映画を鑑賞。会食、歓談、そして渓流と庭園の散歩等に、存分に語り合い有意義な時を過すことが出来た。四月に新装成った本館と、渓流に臨む新築の研修室の利用に恵まれた。

「奥多摩園」は秩父多摩甲斐国立公園」内にあり、御岳山・鳩の巣渓谷を流れる多摩川の清流に沿う緑豊かな傾斜面の敷地三万八千㎡に在り、ブリヂストン創業者・石橋正二郎氏の別荘を継承して保養所と研修所を設け、社員・OB・家族の利用に供されている。

第一日目の映画は、①「会議は踊る」（DER KONGRESS TANZT）1931年、独作品。②「ヴィクトリア女王・世紀の愛」（The Young Victoria）2009年、英米合作。第二日目は、③「英国王のスピーチ」（The King's Speech）2010年、英国作品を鑑賞した。

「会議は踊る」は、仏革命戦争とナポレオン戦争後の「ヨーロッパ国際秩序の再建」を図って開かれた「ウイーン会議」は難航し長引いた（1814/9～15/6）。その間、会議そっちのけで舞踏会にうつつを抜かす各国首相、ロシア皇帝とウイーンの娘の恋と逢瀬の展開が描かれる。ドイツの音声入り初期で、ミュージカル映画の出発点となった作品である。

「ヴィクトリア女王・世紀の愛」は一八三七年十八歳で即位し、英国を最強の国家に導いた若き日の「ヴィクトリア女王」（1819～1901）が、夫妻が数々の苦難を乗り越えて「真の絆」を結ぶまでの道程、十九世紀英国王室の気高く絢爛豪華な「ヴィクトリア王朝」の姿を描いている。

英国王のスピーチ」は、兄「エドワード八世」がシンプソン夫人との結婚で王冠を捨てたため、王位を継いだ弟の「ジョージ六世」が、妻の深い愛情、言語診療士の身分を

越えた友情と支えによって、「吃音の障害」を克服して、国民を鼓舞し心を一つにすべく演説をこなし、「真の国王」として国民から信頼されるまでを描いている。「ジョージ六世」（1895~1952）は現在の英国女王「エリザベス二世」の父上である。

七月二十二日、チャールズ皇太子と故ダイアナ元妃の長男「ウイリアム王子」妻「キャサリン妃」に、第一子の男の子が誕生した。

王子夫妻の人気は高く、英国は久しぶりの「ロイヤルベビー」の誕生に沸いている。生まれた王子の「王位継承順位」は、第一位・チャールズ皇太子、第二位・ウイリアム王子に次ぐ第三位で、将来の国王になる。

（文責・写真）橋本 吉信

奥多摩園「展望のレストラン」

英訳実記を読む会報告

担当幹事　岩崎洋三
Tel &Fax 03-3488-0532
iwasakiyz1116@gmail.com

■第百十四回

六月二十日、Ch. 93 A General Survey of European Commercial Enterprise「第九十三章 欧羅巴洲商業総論」で久米は欧州における商業の本質を物産の流通と捉え、物流の基本手段である運河や道路の建設、並びに船舶や車両の製造の重要性を強調する。なかでも商業の重要部分を占める輸送業を規定する法規の起源はルイ十四世時代の「陸上商法典」（1673年）と「海上商法典」（1681年）に遡るほど古く、これら二つの商法典が改定されて「ナポレオン法典」（1804年）の商法となったと述べる。

欧州の商業取引所と商工会議所の役割に関する久米の分析は的確である「輸送手段や倉庫が確立されて貿易が盛んになると、輸送された商品の取引を安定化するために商業取引所が必要となる。商業取引所では商品の需要供給に関する様々な情報に基づいて市価が決定される。商業取引所設置に際しては、政府の許可を得て地方政府が監督し、商業裁判所と商工会議所が協議して取引所運営規則を定める。地域の商工業の発展を図るためには商人が議員を務める商工会議所の設置が肝要である。」と述べる。

なお、複数の通貨単位で示された貿易額を比較しようと調べたところ、1865年から1927年まで仏フランを共通通貨とする通貨協定、「ラテン通貨同盟」が存在したことが分かった。当時既に欧州共通通貨制度の萌芽が見られたことは興味深い。

（文責）樫原 知子

■第百十五回

七月十八日、Chapter 94 A Record of the Voyage through the Mediterranean

いよいよ帰国の途に着くことになり、郵船Ava号で午前十時マルセイユを出航。

翌日、コルシカ島とサルデイニア島の間の海峡を過ぎる。フランス領のコルシカ島はナポレオン一世の生まれたところである。イワシの油漬サーデインはイタリア領サルデイニア島の名産である。

サルデイニア島の沖合の小さな島カプレラ島に、イタリア独立運動の志士ガリバルデイの家がある。ガリバルデイは先のイタリア統一戦争の時、義勇軍を率いて旧弊な政治打倒のため闘った英雄である。彼は王権、宗教の権力を廃するのを自分の使命と心得た人であったが、この頃には、イタリア政局から退いて、この小島に戻り、自由な日々を楽しんでいたのである。〈彼は結局、一八八二年にこの島で生涯をおえた〉

シチリア島の南に、地中海で名高い要塞の島マルタ島がある。ナポレオンがこの島をイギリスのインド航路を脅かす意図で手に入れようとして失敗し、結局マルタ島はイギリスの統治下におかれた。ジブラルタルとマルタは地中海のイギリスの力の強固な裏付けとなったのである。

七月二十六日アフリカのエジプトに近付き、ポートサイドの海岸に達する。いよいよスエズ運河に入るのである。

面白いのは、水を運搬するのに、「豚水」をラクダで運んでいるのを見たところである。久米は、「豚水トハ豚ノ全革ヲ取リ四脚ヲ緊括シ、水袋トナシタルモノナリ」と記述しているのだが、ここがイスラム圏であることを考えると、豚を不浄なものとみるから、山羊か羊の革袋であろうと思われ、Pigskins ではなく Goatskins であろうと英訳者の注がしてあることである。そういう文化あるいは宗教の背景までを、久米が知らなかったとしても当然だという気がする。

（文責）斉藤 恵子

関西支部報告

担当幹事　難波 康熙
namba@jttk.zaq.ne.jp

■第六十七回

六月二十九日開催、出席者八名。第二編第三十四巻「新城府（ニューカッスル）の記・下」

西欧の近代産業社会は、専門分野の生産技術知識を深めて身につけている人々と、技術専門知識を持っていなくとも事業家としてそれらの専門知識を持った人々を組織することから成り立っており、それが社会としての力を発揮していることを喝破している。

使節団が英国に滞在していたまさに一八七二年に英国の政策の大転換が起こる。実記には全く触れられていないが、英国宰相となるディズレイが「帝国の統合」を掲げることで、政治的な地位を磐石なものとする。英国民はディズレイの政策転換を歓迎したのである。それまでは、意外なことであるが、英国は経済力が優位にある国が常に掲げる自由貿易主義を標榜し、これは植民地の直接支配を厭う小帝国主義と表裏一体をなしていた。しかし一八七二年以後には英国の真の帝国主義の時代が始まったといえる。

（文責）難波 康熙

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会　員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回、全体例会があります。

部　会　テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」
〒135-0021
東京都江東区白河 4-9-14-1407
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:090-4723-9705　FAX:03-3641-9407

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5, 000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込（振込）をご利用ください。

00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ 等
また、書籍・ＤＶＤ案内もあります
http//www.iwakura-mission.jp
＊お知らせ欄も時々チェックしてください

＜催し案内＞

2013年10月～12月の予定です

☆10月全体例会

日　時：平成25年10月13日（日）13:00～16:45
　第１部　例会　　13:00～14:00
　第２部　講演会　14:00～16:45
テーマ：『金融資本の跋扈』―２１世紀になぜ金融システムは肥大化したのか
講　師：板谷敏彦氏
場　所：学術総合センター　中会議室
会　費：2,000円（同伴ゲスト1,000円）
懇親会：翔山亭 神保町店（板谷氏も出席予定）
　17:00～19：00、会費5,000円

☆実記を読む会

日　時：10月10日（木）14:00～　担当：高橋氏
　11月14日（木）14:00～　担当：堀江氏
　12月12日（木）14:00～　担当：泉氏
場　所：国際文化会館４０１号室
会　費：1,000円

☆英訳実記を読む会

日　時：10月17日（木）14:00～　担当：三原氏
　11月20日（水）14:00～　担当：小坂田氏
　12月19日（木）14:00～　担当：岩崎氏
場　所：銀座ルノアール・マイスペースニュー新宿3丁目店2号会議室

☆グローバルジャパン研究会

日　程：10月18日（金）13:30～　泉三郎氏
　11月 9日（土）13:30～　井上雅晴氏
場　所：国際文化会館（会費：1,000円）

☆歴史部会

日　程：10月21日（月）「加藤高明」（吹田尚一氏）
　11月18日（月）「新島襄」（多田直彦氏）
時　間：18:00～21:00
場　所：国際文化会館４０４号室（会費：1,000円）

☆関西支部例会

日　時：10月12日（土）　12:30集合～16:30
　11月13日（水）
場　所：大阪弥生会館
会　費：1,500円＋昼食代1,000円くらい

編集後記

◇幹事を長年務められた永富邦雄さんが永眠されました。訃報の遺影は昨年の十月例会の際の近藤理事のスナップです。例会での元気な姿を記憶されている方は訃報に驚いたのではないでしょうか。ご冥福をお祈りいたします。

◇二〇一一年の十月例会の後、「新入会員懇親会」が開催され複数の新会員が参加しています。その後、会員増はなかなか実現せず、例会などの参加者数も減少傾向にありました。しかし、ここのところ、当会に関心を持ち、会員となる方が増えてきました。そこで、五名の今年度の新会員の方に自己紹介をお願いし、トピックス欄に掲載しました。これで、当会の平均年齢も若干下がり、活性化の契機になるものと期待しています。

◇新会員増の背景には、九月で百Ⅶ十五回を数える実記を読む会を始め、英訳実記を読む会、歴史部会の質の高い活動の持続があります。加えて、歴史ツアーの記念文集が直ぐにまとめられ、再開されたグローバルジャパン研究会が静かな盛り上がりを見せるなど、幅広い動きの進行も作用しているのではないでしょうか。（N）